

～吾が故郷は上桜田地区の
寺社シリーズ No 5～
「地蔵堂」

今回は「地蔵堂」につ
いてです。

場所は、耕源寺の南
側、図-1の「ここ」の所です。

「お地蔵様」をお祀りしているお堂で、当町
内会 13 組の岡崎市三良さんが管理していま
す。

る説明する前に、同堂に係り、故人になら
れたO・Uさん（遺族は当町内会員）が生前纏
められた資料を入手出来た事から次ページ図-
4に紹介・記載します。とても貴重な資料だと思
います。

町内会発信
⑥
回覧



図-1

1. 境内

全体の状況は図-2上のとおり、境内に「牛頭天王塔」と「三界
萬霊」の二つの石塔（石碑）が安置されています。



図-2

同図下によると、この石塔を「石仏二つ」として記述しています。敢
えて「仏」の文字を使った意図は何なのか、という事にちょっと触れて
みます。O・Uさんはその下段に「成仏を願う対象」「他の生を受けて
何度も生まれ変わること」と記述しているが、字面だけからは、死んだ
後のあの世のこと、のように見えます。

しかし、この石を設置するに当たっては、生身の人間が関わり合い、
安産・子供の成長・家内安全・農業繁栄・商売繁盛・無病息災・心願成
就等の祈りを捧げる場があって、人としての生き方を語らう場があっ
て、必要な経費を出し合う助け合いがあった事でしょう。そして自身に

向き合う、そのような人倫行為は
ほとけごころ
仏心である、との人間としての素朴
な生を表現したいが故に、もは
や、「石」はたかが石では無く、「仏心を宿した石である」と言いたかつ
たのではないかと、思っています。

このようなことから、仏教的な文字を刻んだ石塔・石碑は“たかが
石”では無く、先人の思いや多彩な信仰形態を凝縮・内包したものであ
ります。これらのものの殆どは江戸時代に建立されたものであるが、地
域と人々との関わりから見ると、協調・相互扶助・共存共栄の精神を強
靱な軸として、幾多の歴史の変遷と格闘しながら、今日に生きていると
いう事が読み取れます。“石”の一つひとつは異なった神仏を宿した神
社や寺院の縮図、一つの地域の文化・歴史を凝縮したミニチュア、と理
解していいのではないかと、思っています。

2016(平成 28)年 5 月 15 日
上桜田町内会長

2. お堂の内部

内部は図-2下のとおりです。正面中央の祭壇には、赤い布で着飾
られた木造のお地蔵様が祀られています。信者の寄進された千羽鶴が
飾られており、正面扉は常時開放されている事から、どなたでも平易
にお参り出来る環境となっています。また、二つの石塔の由来を記し
た木札が下げられています。さらには、お地蔵さまの上部天井面の処
には、「地蔵堂（字並びは右から左に）」の扁額が取付けられておりま
す。これだけは周りより一段と黒ずんでいるが、その昔、護摩焚き修
法を行したのではないかと、思われます。

3. 歴史

図-3によると元は耕源寺の護法善神（寺院の守護神）であった、と
あります。地蔵様の「縁日」が毎月 24 日であることから、特に 4 月 24
日には、堂守の岡崎市三良さんをはじめ、信仰を寄せる人達が参集し
てお祭りを斎行しております。「吾が故郷は上桜田地区の寺社シリー
ズ No 3～『太子殿』」でも取り上げたが、次ページ図-4をご覧ください。
この古絵図（左方向が北）は同地蔵堂にも向かって左側壁面に掲示
されています。元文五(1740)年に描いたとあり、下段には前出O・U
さんが注釈を加えております。この古絵図（276 年前作成）にもこの
「地蔵堂」が記述されている、しかしもっと古く、図-3にあるとおり
500 年くらい前（戦国時代）にはここにあった、という事が読み取れ
ます。

地蔵堂について

地蔵さまがここにあった理由

*創立年は不明。 安産地蔵
 *村山四八地蔵 第三七番

としごと、 たがわぬ花のさくらだを
 みるにつけても ねがいのらのせ

*判っていること、五百年前に耕源寺が近くにあつたこと。「境内にあったかも」
 *推察できること

耕源寺がここにあったころ、寺の守り神として建立され、耕源寺が荒屋敷の大師堂の場所に移転したときに、そのまま残して移った。元の耕源寺は地蔵堂の近くにあったことが判明している。現在の伝助持ち・九右衛門持ちの土地は元の耕源寺の跡地であろう。そして、耕源寺が移転した後、岡崎市三良家（清次右衛門か清助）が地蔵堂を管理していたに違いない。

下記の二つの石塔は、当時の地蔵堂が祈願の場所だったのでそこに建立したと考えられる。

石仏二つ

牛頭天王塔 ござてんのうとう
 天保四年五月 當村中が建立（西歴一八三四年）
 欲界第六天 天子の称。成仏することを願う対称（守り神）

三界萬靈 さんかいばんれい
 享保八年八月二十四日 （西歴一七二三年）
 講中二十名建立 石工卯蔵

一切衆生の生死輪廻（せいしりんゑ）する三種の世界。欲界色界、無色界。衆生が活動する全世界を指す。

輪廻＝衆生の靈魂が三界六道に迷い、他の生を受けて何度も生まれ変わることを指す。

*ついでに
 馬頭観音 ばずかんのん
 頭上は馬頭を戴いて怨怒（おんぬ）の相をなした観世音菩薩。馬頭明王ともいい、八大明王の一つ。

平成十八年五月 岡崎梅治記

図-3



図-4

このお地蔵さま信仰に係り、宗教学者の山折哲雄氏の著書「仏教民俗学（講談社学術文庫）」より、ユニークな見方をしている部分を取り上げてみます。――わが国の歴史のなかで、民衆のあいだに広がり抜群の人気を得た守り本尊は、観音菩薩・不動明王・地蔵菩薩であった。第一の観音菩薩は、母の慈愛を一身に体現する理想的な女性のイメージを仏教化したもの。第二の不動明王は、外部の敵を打ち砕くエネルギッシュな男性的なイメージを仏教化したもの。第三の地蔵菩薩は、子供達を救う菩薩は、やがては子供のイメージを仏教化したものとなった。要するに、観音・不動・地蔵は、わが国の庶民信仰レベルでは父・母・子の関係を理想的な姿で描いた聖家族であった。・・・[子供であるお地蔵様が、いつのまにか、六道輪廻の世界に住んで、あの世とこの世の境で迷い人を裁く閻魔大王や、娑婆での道祖神として信仰されるようになった・・・]――（なるほど！）

- 【 編集後記 】
- ・岡崎市三良さんからは、ご協力を賜り、まことにありがとうございました。
 - ・外観の建物はややねじれており、地味な雰囲気ですが、手入れが行き届いており、お地蔵様の霊気が溶けている趣きがあります。

（上桜田町内会 総務担当 大沼 香）

以上